様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　6 月　17 日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520154
研究課題名（和文）　1910-1930〈日韓・韓日〉文学交流の歴史 -〈移入〉という視座から -

研究課題名（英文）　1910-1930　On the historical exchanges between Japanese and Korean literature -from the viewpoint of transformation-

研究代表者
奥田　浩司（OKUDA KOUJI）
石川工業高等専門学校・一般教育科・教授
研究者番号：90185538

研究成果の概要：1910～30 年にかけては、韓国近代文学の草創期にあたる。その際に、明治末から大正にかけての日本の文学・思想の主たる潮流が紹介されている。本研究では、主として文化統治期の朝鮮語雑誌に焦点をあて、資料の紹介・考察を行った。それと同時に、日韓の研究者が、日韓関係の問題点について議論を行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,800,000	0	
2007 年度	1,000,000	300,000	
2008 年度	600,000	180,000	
年度			
年度			
総　計	3,400,000	480,000	3,880,000

研究分野：日本近代文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：朝鮮語雑誌、有島武郎、大正デモクラシー、吉野作造、日韓関係、

１．研究開始当初の背景

2004 年 10 月 30 日に韓国（ソウル）の誠信女子大学において行われた、韓日合同日本近代文学研究会において、「有島武郎の『或る女』における〈家族〉-葉子と〈家族〉の抗争-」と題して発表した。その際の質疑応答の過程で、大正文学と朝鮮語雑誌との間には深い関わりのあることが分かってきた。例えば、有島武郎は、韓国近代文学を代表する作家である金東仁、廉想渉に受容されている。無論のこと、有島武郎の朝鮮における受容については、一定程度の研究成果がある。しかし、研究は十分とは言えない。さらに、先行研究の多くは、一方的な影響関係の指摘に止める傾向にある。このような研究状況に対して、本研究では、朝鮮語雑誌を精査し、日韓の交流史を、より錯綜した関係において捉え直すことを企図した。

２．研究の目的

日韓の研究者が共同して以下の研究を行う。

(1) 1910～1930 年にかけての朝鮮語雑誌に関する資料の収集と紹介をおこなう。
(2) 大正期の白樺派を中心とした文学運動と韓国近代文学草創期の関係を明らかにする。
(3) 日韓の問題について討議を行い、「和解」の可能性を探る。

３．研究の方法

（1）韓国の延世大学図書館・古文書館において、資料調査を行う。

（2）日韓の研究者が大正期の日本の文学運動と韓国近代文学との関わりについて、共同で調査し、討議する。

（3）日韓の研究者が、日韓の歴史認識の問題について、共同で討議する。

４．研究成果

研究成果については、大きく次の４点に分けることができる。

(1)資料の発掘と紹介を行った

（2）朝鮮語雑誌『廃墟』の解題を作成し、目次の日本語訳を行った。廉想渉の「闇夜」を抄訳した。

（3）具体的な、作家・作品を取り上げて考察した。

（4）日韓の歴史認識に関する議論を行った。

上記の順番にしたがって、以下に詳述する。

（1）資料の発掘と紹介

①延世大学図書館・古文書館（Center for Korean Classics Collection）には日本統治下において発刊された朝鮮語雑誌が数多く所蔵されている。延世大学は、日本統治下の朝鮮では、大学としての認可を得られなかった。しかし、朝鮮民族の高等教育を支える重要な役割を担っていた。そのような教育機関の図書館に、朝鮮語雑誌が多く所蔵されていたことは、独立運動との関係を推測させる。この点については、今後の研究課題である。

さて、本研究では、古文書館に所蔵されている『現代』について調査した。『創造』『廃墟』などいくつかの朝鮮語雑誌については、韓国において復刻されている。しかしながら、『現代』は、比較的よく知られている雑誌（機関誌）であるにも関わらず、復刻されておらず、読むことが難しい状況にあった。そこで、調査を行い、論文として発表した。ただし、コピー・デジカメ撮影などは許可されなかったため、筆写した。したがって、誤写の可能性は否定できない。

（論文）

・「『現代』の「民本主義」−文化統治期の朝鮮語雑誌研究−」（『金沢大学国語国文』第 34 号　2009.3）

・「研究ノート　朝鮮語雑誌『現代』の研究（二）−文化統治期の朝鮮語雑誌研究 -」（『金沢大学国語国文』第 33 号　2008.3）

・「研究ノート　「文化統治」期の朝鮮語雑誌研究」（『金沢大学国語国文』第 32 号平成 2007.3）

『現代』は、東京で活動していた朝鮮基督教青年会の機関誌である。編集権発行人は、白南薫である。機関誌の奥付を見ると「京城」から「浦鹽斯徳」にいたるまで、広範囲で販売されていたことが確認できる。恐らく、東京で編集・印刷された後に、各所に運ばれ販売されたのであろう。機関誌であることを考慮すれば、情報を共有する意味もあったのではないだろうか。

大正デモクラシーを代表する吉野作造の評論「朝鮮青年会問題」（『新人』大正 8.3）では、「基督教青年会」「白南薫」に言及し、独立運動との関係を示唆している。「白南薫」については、「予輩の親友」とまで言っており、相当に親しい間柄であったことが知れる。だとすれば、吉野が『現代』の存在を知っていたと考えても不自然ではない。

『現代』の執筆者には、吉野作造と関係のある者が多い。吉野が中心的なメンバーの一人であった黎明会の講演に、朝鮮人留学生が招かれている。「黎明会記録」（『黎明講演集第四輯』大 8.3）によれば、「第四回例会／三月十九日午後六時より学士会館に於て開会。来賓牧野英一氏の『同盟罷工権』に関する講話、並に朝鮮学生諸君の談話を聴く。／（略）／来賓。／牧野英一氏、松岡駒吉氏、金雨英氏、姜宗燮、金俊淵、崔承萬、張仁煥、白南薫、卞熙鎔、徐相國」とある。これら朝鮮人留学生のうち、金俊淵、崔承萬、白南薫、卞熙鎔は『現代』の執筆者である。

吉野との強い関わりが伺われるのが、『現代』５号に掲載された、卞熙鎔の「民本主義の精神的意義」である。まず注目されるのは、「民本主義」という言葉が使われているという点である。さらに注目されるのは、この評論では、朝鮮人留学生の間で「民本主義」が流行していたことが述べられていることである。以上の点から推測されるのは、吉野の「民本主義」をめぐって、朝鮮人留学生の間に、相当な議論が巻き起こっていたことである。

しかし、卞熙鎔の「民本主義の精神的意義」を見る限り、吉野の「民本主義」をそのまま受容しているようには思われない。詳しくは、今後の研究に委ねるしかないが、恐らく批判的に受け容れようとしているように考えられる。

今後の課題としては、まず『現代』について更に調査を進めていくことが必要である。そして、それと同時に、「民本主義」がどのように受け容れられていたのかを明らかにすることも課題である。

②『韓国雑誌概観の号別目次集』』（金根洙編著 1973.5 永信アカデミー）を基に、「文化統治時代の朝鮮語雑誌（機関誌）一覧表を作成した。金根洙氏の調査によれば、文化統治時代に発刊された朝鮮語雑誌については 168 種

類が確認されている。日本では、ほとんどその存在の知られることの無い雑誌である。なお、作成した一覧表については、『文化統治期の朝鮮語雑誌研究−日韓交流史に関する研究−』としてまとめ、石川工業高等専門学校図書館に置くことを予定している。

（2）朝鮮語雑誌『廃墟』の解題と目次、廉想涉「闇夜」抄訳

研究協力者である孫知延（慶熙大学）柳利須（韓国外国語大学）が『廃墟』の解題・目次を作成した。柳利須が廉想涉の「闇夜」を抄訳した。

①『廃墟』解題

「成立」

『廢墟』(1920 -1921)は、『創造』と共に韓国に近代文学を展開し始めた初期の文芸同人雑誌である。『廢墟』は廣益書館の高敬相の援助によって通巻 2 号まで発刊された。同人は、南宮壁、金億、李赫魯、金永煥、羅蕙錫、閔泰瑗、金瓚永、廉想涉、呉相淳、金元周、李丙燾、黄錫禹、卞榮魯である。主要同人は日本に留学して、西欧文学だけでなく日本の自然主義、人道主義など日本文学の洗礼を受けていた。

「特徴」

文学青年達は、3.1 運動失敗以後、社会的絶望状態から精神的な内面生活を求めていた、文学青年達による『廢墟』は 19 世紀西欧文学の象徴主義、頽廃的浪漫主義雑誌として評されている。

ところで、'廢墟'という題目は、「昔のものは滅び、時代は変わった。我が生命は廃墟から来る」というドイツの Schiller の詩と関係がある。即ち、ここで'廢墟'とは'創造'と同じ意味合いも持っていると言える。挫折感の漂った、日帝支配下にある朝鮮の廃虚のような現実を克服し、新しい朝鮮を作り出そうとする思いが込められている。

『廢墟』は日本の『白樺』に倣おうとした。「『今後十年後を期して我々の発展を見よ。』と宣言して置くのが一番適当であろう。（中略）隣の日本を見ても、あの白樺派が日本文壇に新旗幟を立てて現れて、十餘年間に（中略）誰でも日本文壇で白樺派の勢力と功績とが無視できなくなった。」（南宮壁、「廢墟雑感」、『廢墟』２号）と述べている。

「文壇での位置」

柳宗悅夫妻が音楽会のために朝鮮に来たとき、廢墟派は韓国を代表する文芸団体のように彼らを迎え、音楽会の開催に関わった。そこには、南宮壁が柳宗悅に私淑した関係もある。中心人物である廉想涉は東亜日報記者として、メデイアを十分活かすことによって、音楽会も廃虚派の活躍も大いに知らせることができた。その結果、『廢墟』は登場時期においても規模面でも『創造』に遅れていたが、『創造』と肩を並べることができた。

また、廉想涉は創造派の主要人物である金東仁と論争を展開して、廢墟派を創造派と同等な水準まで引き揚げる効果を得た。

『廢墟』は『創造』より一歩遅れて出発したが、『三光』(1921.2 創刊、『創造』創刊と同じ時期))をその前身とみることができる。中心人物である廉想涉は『三光』の黄錫禹からの同人依頼を受諾し、２号(1919.12)と３号(1920.4)に詩と評論を掲載した。

一方、『廢墟』は『創造』に比べて詩、評論が多かった（小説は一篇のみ）。同人の詩人たちによって作られた『薔薇村』『白潮』は『廢墟』の後身とみなされる。後日『廢墟以後』も発刊するが 1 号で終刊となった。

②『廃墟』目次

創刊号
廃墟に立って　（廉尚燮）
朝鮮の古代藝術と吾人の文化的使命（李丙燾）
夕暮れは暮れる（象牙塔）
-　外短曲十篇　-
K 兄へ（金瓚永）
洋鞋と詩歌　（羅景錫）
ベルレン詩抄　（金億）
時代苦とその犠牲　（呉相淳）
黄薔薇花　（李赫魯）
自然 (五山片信)　（南宮壁）
法衣　（霽月）
日本詩壇二大傾向　（黄錫禹）
四つの足音　（歩星）
ある少女　（閔泰瑗）
スピンクスの苦悩　（岸曙）
- 想餘 -　（同人）

第二号
廢墟(詩)　（シレル）
宗教藝術(評論)　（呉相淳）
ベルレン詩抄(譯詩)　（岸曙）
メテルリンクとエイツの神秘思想(評論)　（卞榮魯）
川水(詩)　（羅晶月）
Van Dyke の日本風景(譯詩)　（李丙燾）
まず現状を打ち破れ(評論)　(金元周)
草(詩)　(南宮草夢)
樗樹下で(隨想)　(想涉)
プロベル論(評論)　（金億）
力の崇拝(評論)　（呉相淳）
月評　（廉尚燮）
同人印象記　-呉相淳君の印象 -　（同人）
音樂會(小説)　（閔苔原）
廢墟雜記　（同人）
編輯餘錄
挿画
羅馬劇場廢墟(巻頭)　（ほほ）
呉相淳君の肖像

③廉想渉の『闇夜』抄訳。

上記①、②、③の資料については、『文化統治期の朝鮮語雑誌研究–日韓交流史に関する研究–』としてまとめ、石川工業高等専門学校図書館に置くことを予定している。

今後の課題としては、『廃墟』と『白樺』との比較検討があげられるであろう。周知のように、『白樺』は基本的には「自我」への無垢とも言える肯定を信条としていた。それに対して、『廃墟』は、独立運動の挫折から出発している。喪われた民族の「自我」を再生しようとする試みは、『白樺』の自己肯定とは自ずから異なっているはずである。この点を明らかにすることで、大正期の日韓交流史の一つの側面が明らかになるものと思われる。

（3）作家・作品を取り上げて、具体的に考察した。

① 研究協力者である金希貞（翰林大学）が、「有島武郎と韓国文学（２）―1920 年代初期の朝鮮における「小さき者へ」の受容―」(『金沢大学国語国文』第 34 号　2009.3）において、有島武郎の韓国文学における受容について、考察した。金希貞論文では、有島と韓国近代文学の関係について、以下のように指摘する。

1920 年代初期、有島武郎は日本に留学し韓国近代文学を切り開いていった草創期の朝鮮人作家たちに、最もよく読まれた日本人作家であろう。田榮澤は、「すばらしい西洋文学に目を開かれ、当時非常な勢いで隆盛していた日本の文壇に対し、その中でも特に有島武郎などの文学に対しては羨望の思いを禁じえなかった」と述べているし、日本の文学者を無視していた金東仁も、有島武郎にだけは肯定的な評価をしている。また、『白樺』誌を毎月愛読するほどのファンであった朴鐘和は、「白樺派同人の中では有島武郎の作品とその人間性を最も好んだ」と述べている。

有島武郎が留学生たちの個人的な享受の対象に留まらず、朝鮮民衆の前に具体的に紹介されるようになるのは 1920 年になってからのことである。1920 年９月、金東仁の翻訳によって『曙光』第８号に「死と其前後」が載り、翌年の１月朴錫胤により「小さき者へ」が『創造』第 8 号に掲載された。当時、東京帝国大学法学部に在学中の留学生であった朴錫胤は「小さき者へ」に感動して一気に読み上げ、翻訳するまでに至ったと自ら述懐している。朴錫胤 は「小さき者へ」のどのような点に感動をうけたのだろうか。（略）／「小さき者へ」は周知のように有島武郎の私生活を素材とした作品であるが、1910 年代後半から朝鮮人作家たちに最もよく読まれ、注目され、感動を与えた作品である。金東仁は、「小さき者へ」をはじめ「平凡人の手紙」や「死とその前後」など、有島の私生活を素材とした作品に特別な関心を寄せている。

上記のような同時代状況から、金希貞論文では、「小さき者へ」を中心に、有島武郎の韓国近代文学における受容の様相を明らかにし、大正ジャーナリズムの影響、朝鮮社会の問題と関連づけている。

金希貞論文では、結論として、「小さき者へ」受容の背景には、「「近代的」な家庭」への「志向」があったとする。そして、有島の私生活への関心には、ジャーナリズムの存在があることを指摘している。

② 研究協力者である柳利須（韓国外国語大学）が、「韓國近代文學における有島武郎の『宣言』–廉想渉『お前たちは何を得たのか』を中心にー」と題する報告書を提出した。柳利須報告書では、廉想渉の『宣言』受容を明らかにし、朝鮮の置かれていた植民地状況、さらには植民地女性の従属性について論じている。柳利須報告書では、以下のように述べている。

韓国の近代文学は一九二〇年代に入ってから開花期の啓蒙的文学と打って変わって、個人の内面問題に関心を注ぎながら芸術性を追求していくようになる。日本留学から帰った金東仁は韓国最初の文学同人誌『創造』(一九一九年)を、廉想渉は『廃墟』(一九二〇年)を創刊して、韓国近代文学を築き上げようと努力した。韓国近代文学の形成期にあって、廉想渉、金東仁、田榮澤等の代表的作家たちの作品に『宣言』の影響が見えるというのは、韓国近代文学の出発と方向の設定に『宣言』が一つの座標となっていたと言っても過言ではない。その中でも、『宣言』の影響の著しい廉想渉の『お前たちは何を得たのか』との関係について重点的に考察しようとする。

日本留学から帰ってきた廉想渉は、一九二〇年、東亜日報の創刊記者として活躍する傍ら、『白樺』をモデルとした文学同人誌『廃墟』を創刊し、文学を通して韓国の近代化を図った。廉想渉の『お前たちは何を得たのか』でマリアは、韓国が乗り越えるべき封建的因習や植民地という現実のなかにあって、それも女性という性的に被支配階級に置かれていた。本稿では、そのマリアが持っている近代志向の一断面に働いた『宣言』の役割と、さらに廉想渉作品の独創性を突き詰めてみることにする。

上記のような問題意識に立ち、柳利須報告書では、『宣言』受容の問題と、植民地状況

との関わりについて議論を展開している。例えば、『お前たちは何を得たのか』の主人公マリアが、男性と植民地という二重の抑圧の下にあったことを指摘している。

柳利須報告書を、本報告書に全文収録することは紙幅の関係上できない。前掲『文化統治期の朝鮮語雑誌研究−日韓交流史に関する研究−』に収めることにする。

（4）日韓の歴史認識に関する議論。

日韓の歴史認識の問題については、團野光晴が以下の論文を発表している。

- 「過程としての和解−朴裕河『和解のために』の問題−」（『金沢大学国語国文』第 34 号　2009.3）
- 「「エグザイル」の可能性−〈日韓・韓日〉文学交流研究にむけて−」（『金沢大学国語国文』第 32 号　2007.3）

團野光晴論文を紹介する前に、本研究が現在の日韓関係までをも射程に収める理由について言及しておきたい。

1910−1930 年にかけての日韓・韓日の交流は、柳宗悦、吉野作造の存在に象徴されるように、比較的友好的な側面を備えていた。その限りで、日韓・韓日の交流を考へる上で、ある種の可能性を秘めていた時期であると考えられなくもない。

だが、交流の可能性について考える前に、まず「和解」について考察する必要があるであろう。なぜなら「和解」の方向性が定まらなければ、「交流」の可能性とは何であるのかという点について考へることはできないからである。

そこで、本研究では、日韓・韓日の研究者が集い、「和解」の可能性について討議した。討議の中心となったのが、團野光晴である。

團野光晴（2009）「過程としての和解−朴裕河『和解のために』の問題−」では、朴裕河『和解のために』を取り上げ、検証していく。團野論文では、まず朴裕河の議論が「保守に親和的」であるという日本の左派からの批判を取り上げる。團野論文では、朴裕河の議論の問題を、「全面的なナショナリズム否定に帰結する」ことにあるとする。それに対して、團野光晴論文では、安江良介を例に取り、革新ナショナリズムに意義を見出す。さらに、團野光晴論文では、「反ナショナリズム」の問題点に言及する。「反ナショナリズム」は、「「過去の清算」を不問にした「未来志向」につながりかねない」とする。

以上のように、團野光晴論文（2009）では、日韓・韓日の「和解」のためには、「ナショナリズム」の問題について考察を深めることの必要性が論じられている。

他方、團野光晴論文（2007）では、「エグザイル」の着目し、「グローバリゼーションに対抗しつつ、ナショナリズムを異化する」ことの可能性について論じている。團野光晴論文では、それを「「エグザイル」のナショナリズム」と呼び、「より多様性を許容する豊かなもの」を目ざすとする。

團野光晴論文（2007、2008）に明らかなように、「和解」について論じるためには、「ナショナリズム」の問題を検証しなければならない。

本研究で調査・検討した朝鮮語雑誌では、独立を勝ち取るために、民族ナショナリズムを要件としていたもののように思われる。それに対して、大正期の日本は帝国ナショナリズムを形成しつつあった。日韓の「交流」とは、〈帝国〉と〈独立〉が、それぞれの「ナショナリズム」を通して交錯する場であった。

今後の検討課題は、大正期の日韓・韓日の知識人の交流を通して、〈帝国〉と〈独立〉の「ナショナリズム」が、いかに干渉しあっていたのかを考へることにある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 奥田浩司、「『現代』の「民本主義」−文化統治期の朝鮮語雑誌研究−」、『金沢大学国語国文』、第 34 号、248-258、2009 年、査読有
② 團野光晴、「過程としての和解−朴裕河『和解のために』の問題−」、『金沢大学国語国文』、第 34 号、106-114、2009 年、査読有
③ 金希貞、「有島武郎と韓国近代文学（2）−1920 年代初期の朝鮮における「小さき者へ」の受容−」、『金沢大学国語国文』、第 34 号、259-271、2009 年、査読有
④ 奥田浩司、「研究ノート　朝鮮語雑誌『現代』の研究（二）−文化統治期の朝鮮語雑誌研究−」、『金沢大学国語国文』、第 33 号、22-30、2008 年、査読有
⑤ 奥田浩司、「研究ノート　文化統治期の朝鮮語雑誌研究−」、『金沢大学国語国文』、第 32 号、26-33、2007 年、査読有
⑥ 團野光晴、「「エグザイル」の可能性−〈日韓・韓日〉文学交流研究にむけて−」、『金沢大学国語国文』、第 32 号、34-45、2007 年、査読有

〔学会発表〕（計１件）

① 柳利須、「韓国近代文学における有島武郎の『宣言』」、有島武郎研究会、2007 年 6 月 9 日、旭川大学

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
奥田　浩司（OKUD KOUJI）
石川工業高等専門学校・一般教育科・教授
研究社番号：90185538

(2)研究分担者
團野　光晴（DANNO MITSUHARU）
石川工業高等専門学校・一般教育科・准教授
研究社番号：60280377
寺田　達也（TERADA TATSUYA）
金沢学院大学・文学部・准教授
研究社番号：80329440
梶谷　崇（KAJIYA TAKASHI）
北海道工業大学・未来デザイン学部・准教授
研究社番号：10405657

(3)連携研究社

(4)研究協力者
金希貞（翰林大学）
孫知延（慶熙大学）
柳利須（韓国外国語大学）